

第2表 第2号土坑出土遺物

用 途	種 別	遺 物 名 お よ び 点 数
調 理 具	陶 器	播鉢4（越前）
	木 器	俎板1、折敷1、曲物1、杓子1、栓2
食 膳 具	陶 器	皿1（瀬戸・美濃）
貯 蔵 具	陶 器	壺1、甕1（越前）
暖 房 具	石 製 品	行火1、火打石1
嗜 好 具	石 製 品	茶臼1
文 房 具	石 製 品	硯2
武 具	鉄 製 品	小札1、刀子1
そ の 他	織 維 製 品	縄1
	鉄 製 品	釘7

ることを付記しておく。

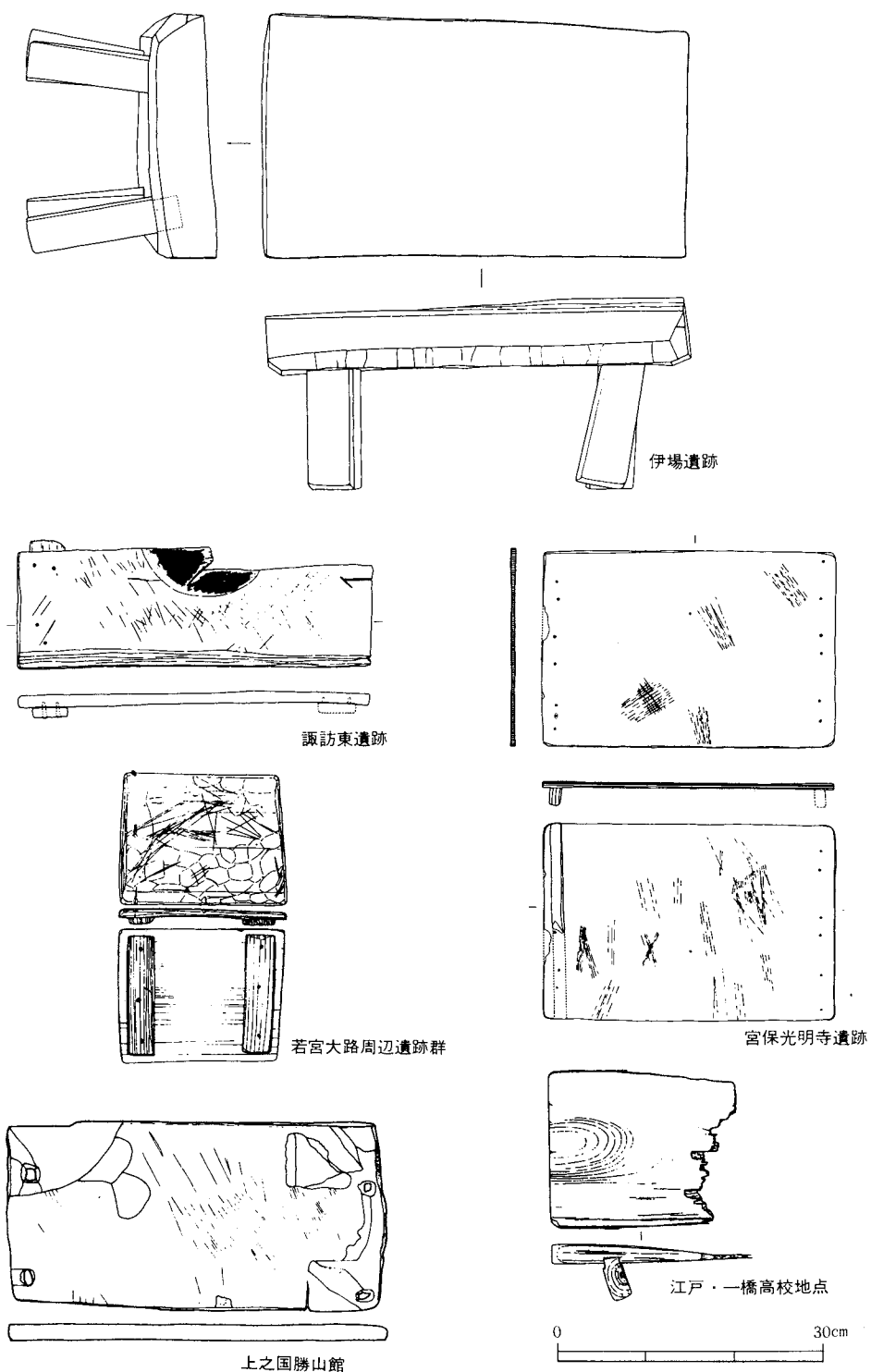
1 俎板について

ここでとりあげる俎板とは魚や獣、野菜等の食物を切る時にのせる板もしくは台のことである。文献では、天平宝字6年（762）に成立した『二部般若用度解案』および神護景雲4年（770）成立の『雑物請帳』に「切机」と見え、延喜・延長期（905～927）成立の延喜式には「切案」という言葉が見えている。これらが俎板を指すものと考えられる。そして、承平年間（931～938）成立の『和名類聚抄』には「俎 和名末奈以太」とみえる。中世に入ると、文安元年（1444）成立の『下学集』に「末那板」、天文11年～同16年（1542～1547）に書かれた福井県三国町瀧谷寺の校割帳⁽³⁾には「切盤」、天文17年（1548）成立の『運歩色葉集』には魚板とみえる。

遺跡出土の俎板 （第22図）

ここでは中世の遺跡に限るが、出土例は少ない。管見の限りでは、鎌倉市の諏訪東遺跡⁽⁴⁾、若宮大路遺跡群⁽⁵⁾、北海道上之国町の上之国勝山館⁽⁶⁾に各1例あり、本遺跡の1例を加えても4例にすぎない。これらは当初から俎板として作られたと考えられるもので、転用されたものはとりあげない。転用された俎板には、折敷、曲物底板、鍋蓋などを一次的な用途とするものがある。調理というものを総合的に捉えるためには当然これらも含めるべきであるが、ここでは紙幅の都合もあって上記の条件をもつものを対象とした。

上記の出土俎板のうち最も古いものは鎌倉の2例で、ともに14世紀代とされる。上之国勝山館例は16世紀中葉である。形状はいずれも長方形である。諏訪東例は欠損のため幅は知り得ないが、



第22図 遺跡出土の組板実測図

長さは40.3cm、残存幅13.5cm、厚さ1.4cmを測り、幅4cm、厚さ1.2cmの扁平な脚が木釘によって取り付けられている。若宮大路遺跡群例は長さ40cm、幅20.5cm、厚さ1.8cmで、脚をとりつけたほぞ穴がのこる。

中世以前の出土例としては、伊場遺跡で2例が報告されている⁽⁷⁾。うち1例は第22図に示したもので、平面長方形で四脚をもっている。板は厚い。9～10世紀の所産とされる。他の1例は棧状の脚をもったものである。いっぽう近世では江戸遺跡・一橋高校地点の例が長方形で棧状の二脚を有するものとして知られる⁽⁸⁾。

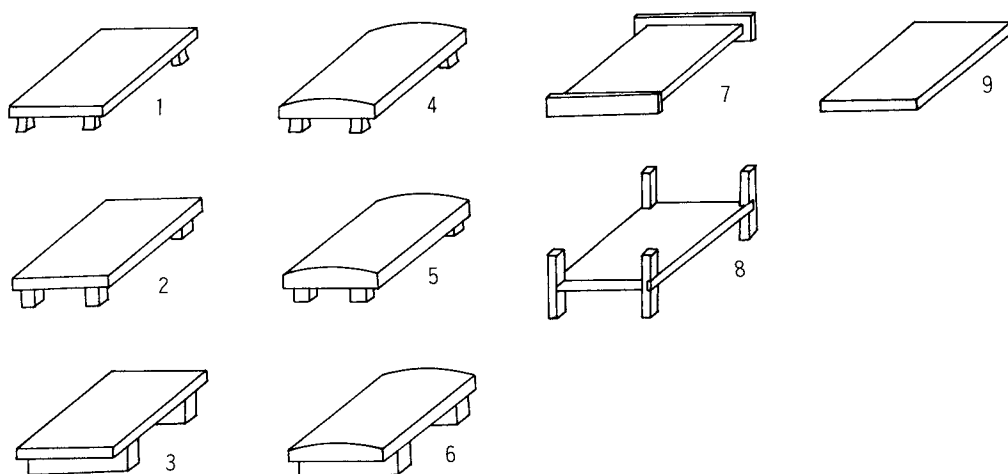
絵画資料にみる俎板（第23図）

中世 絵画資料のうち俎板が最も早くみえるのは、12世紀後半の成立とされる『地獄草紙』である。長方形で、端部が外に反った四脚をもつ（第23図1）。調理者は鬼で、右手に包丁、左手に箸⁽⁹⁾をもち人間を切っている。俎板は灰色に彩色されているので、木以外の材質と思われる。

13世紀代の資料には、『粉河寺縁起』、『北野天神縁起』がある。前者は13世紀初頭、後者は同後半の成立とされる。前者には二種類の俎板がみえる。一つは長方形で四脚をもつもの（第23図2）で、もう一つは長方形で脚のないもの（第23図9）である。脚付の俎板を前にして烏帽子を被った男が右手に漆碗、左手に箸をもち食事中である。調理をした俎板の上から獣肉（鹿か猪）をつまんでいる風景である。包丁は俎板の右上面におかれる。いっぽう、脚のない俎板は、上に獣骨が2本のっている。家の中の同じ場所に描かれているのでとりあげたが、脚のない俎板が中～近世を通じて描かれるのはまれである。調理風景がみえないので、俎板とするのは留保すべきかもしれない。『北野天神縁起』も長方形で四脚である。鬼が右手に包丁、左手に箸をもち人間を料理している。これも俎板の色は灰色に塗られている。

14世紀に入ると、初頭に成立した『春日権限験記絵』、『松崎天神縁起』、前半成立の『六道絵』、『聖徳太子絵伝』、中頃成立の『慕婦絵詞』、後半に成立した『酒伝童子絵巻』が長方形で四脚をもつ俎板を描いている。『六道絵』では鬼が包丁で人間を切っている。『聖徳太子絵伝』では束帯装束の男が右手に包丁、左手に箸をもって猪を料理している。『慕婦絵詞』では烏帽子を被った男が右手に包丁、左手に箸をもって刺身をつくっている。『酒伝童子絵巻』では武士が刀で人間の脚を刻んでいる。さて、『春日権限験記絵』にみられるものは、長方形であるが、短辺に側板状に脚をつけたもので、両面の脚を兼ねるようになっている（第23図7）。ここでは烏帽子姿の男が右手に包丁をもち、左手で押さえた蓮根を切っている。『松崎天神縁起』にみられるのは長方形で四脚であるが、表面がかまぼこのように高くなっており（以下これを甲高と呼ぶ）、脚端も外に反る（第23図4）。烏帽子姿の男が右手に包丁、左手に箸をもって魚を料理している。

15世紀代では、後半に成立したとされる『酒飯論』のなかに、表裏両面に突出した四脚をもつ俎板（第23図8）が描かれるが、18世紀の模写本でしか確認していない。19世紀初頭に成立した『骨董集』⁰⁰ではこれを魚板の古製とし、文明年間の酒食論（酒飯論）や寛永年間の絵に見えるとす。その使用法については「表にて魚類を切、裏にて菜類を切る」と説明している。



第23図 絵画資料にみる俎板(模式図)

16世紀代の資料としては『七十一番職人歌合』と『ねずみ草紙』をあげておきたい。前者は「包丁」と呼ばれる職人を描いており、長方形で四脚の俎板の上に魚をおき、右手に包丁、左手に箸をもった姿がみられる。職業的調理者と明確にわかる最初の絵である。ただし、これ以前の資料でも『聖徳太子絵伝』や『慕婦絵詞』にみられる調理者はこれに類する姿として捉えられる。『ねずみ草紙』では長方形で四脚の俎板が描かれており、袴を着たねずみの調理者が魚と鳥を右手の包丁で調理している。

近 世

17世紀代の資料では『江戸図屏風』に長方形で四脚・甲高の俎板(第23図5)がみえる。この他長方形・四脚の形は『七十一番職人歌合』(版本)、『訓蒙図彙』(同)『狂詠犬百人一首』(同)『吉原風俗図巻』などに見ることができる。調理者はいずれも男性で、職業としての調理者として描かれている。調理物は魚もしくは鳥である。『古今料理集』(版本)では俎板の部分名称および寸法が記されている。

18世紀代に入ると享保期頃の成立とされる『どうけ百人一首』(版本)に長方形で棧状の二脚のもの(第23図3)がみえる。しかし、18世紀後半に成立した『難福図巻』や『職人尽発句会』(版本)には、長方形・四脚・甲高の俎板がみえることより、四脚のものも依然存在していたことを窺わせる。調理物は魚の他に蛸がみえる。本世紀の後半には長方形・二脚のものが一般的になっていたようである。

19世紀に入ると女性の調理者が描かれる。俎板の形状は、従来の長方形・四脚に加えて、長方形・二脚(棧状)(『畧画職人尽』版本)、長方形・脚なし(『素人包丁』版本)などがみられる。調理物も柿、筍、あわびなど多様になる。包丁も、調理物の多様化にともない、従来の刀子状のものに加え、野菜類を切りやすい、菜切り包丁形が出現する。近世に入ると甲高の俎板は見られなくな

る。

20世紀に入ると、大正2年(1913)には、立式の家庭用調理台が出現するが、この上に置かれた¹⁰⁰組板に脚は見えない。大正12年(1923)の立式調理台の組板も同様である。¹⁰²立式の台所と組板の脚は相容れないものであろう。ただ、日本で立式の台所が一般化するの太平洋戦争以後であり、さらにいえば1950年代から1960年代にかけての高度経済成長期に台所の改良がなされ、組板の脚も消えていったのである。

現在の組板は多様である。脚付のものはまず見られない。材質は木製の他にプラスチック製も出現し、大きさも、家族数や調理物の変化にともなって小さくなっている。形は長方形以外に円形やハート形を呈するものもある。魚、野菜を切るといった本来の目的に加えて装飾性も備えつつあるようである。

まとめ

組板の形態変化を簡単に追ってきた。その結果、それを取りまく諸要素も変化することが明らかになった。組板をも含めた調理具、調理物、調理者など調理の場にあるものを総合的に検討することによって、食生活史の一端を明らかにすることが可能となろう。今回扱った絵画資料は一部の地域の一風景を描いているにすぎず、出土資料としての組板が、絵画資料の流れと符合しないのはそのことを端的に示している。残された課題については稿を改めて検討したい。

本書で引用した絵画資料は次の文献に依拠している。

- 中世 『地獄草紙』・『粉河寺縁起』＝小松茂美編『日本の絵巻』 中央公論社 1987～1988 東京。『北野天神縁起』・『春日権限験記絵』・『慕婦絵詞』＝小松茂美編『続日本の絵巻』 中央公論社 1990～1991 東京。『松崎天神縁起』＝小菅桂子『につぼん台所文化史』 雄山閣 1991 東京。『聖徳太子絵伝』＝小泉和子『道具が語る生活史』 朝日新聞社 1989 東京。『酒伝童子絵巻』＝『絵巻』 京都国立博物館 1987 京都。『六道絵』・『ねずみ草紙』＝『週刊朝日百科 日本の歴史』13・63 朝日新聞社 1986・1987 東京。『酒飯論』＝『だいどころの歴史』 石川県立郷土資料館 1982 金沢。『七十一番職人歌合』＝谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第30巻 三一書房 1982 東京。
- 近世 『江戸図屏風』＝高橋昭子・馬場昌子『台所のはなし』 鹿島出版会 1986 東京。『七十一番職人歌合』、『訓蒙図彙』、『狂詠犬百人一首』、『人倫訓蒙図彙』、『和国諸職絵つくし并歌合』、『どうけ百人一首』、『職人尽発句合』、『畧画職人尽』＝谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第30巻 三一書房 1982 東京。『古今料理集』、『素人包丁』＝NHKデータ情報部編『ヴィジュアル百科江戸事情』第一巻 雄山閣 1991 東京。『吉原風俗絵巻』＝大河直躬『住まいの人類学』 平凡社 1986 東京。『難福図巻』＝『週刊朝日百科 日本の歴史』63 朝日新聞社 1987 東京。